

教室活動報告 4

「音楽文化資源論演習・実習」（2021年度）

沼田 里衣

1. はじめに

本授業では、「協働で音楽の場を創出すること」をテーマに、既存の方法を学んだ上で、互いに対話をしながら新たな企画を考案・実施・評価することをおこなった。

2. 授業概要

前期は、学生自らが企画を考案するための準備として、既に考えられているさまざまな音を使った協働の方法を共に試みた。後期は、学生が企画した内容を、互いに吟味しながら実施し、最後に振り返りをおこなった。

2-1 音楽文化資源論演習（前期）

前期は2回目より3分の2の授業がオンラインとなり、音を用いた協働作業は困難な場面も多かったが、対面で可能となった最後の4回において、場を共有するための音楽づくりの方法を試みることができた。

オンラインの間は、外の音を聴いてそれを絵にする課題など各自でできる取り組みを実施し、その後、グループワークとして互いのインタビューから詩を作る「似顔絵詩」や、オンライン上での音の面白さの共有を試みた。対面となったのは、歌づくり、即興による合奏、共同作曲、音楽ゲームを行い、その後に参加者の希望から音楽ルールを共に考えて実施した。

2-2 音楽文化資源論実習（後期）

後期は、学生が考えた企画書を発表し合い、その内容について確認するところから始められた。実施にあたり、場所や対象者などさまざまな困難もあったが、最初に俎上に上がったのが、学生自身の「苦手意識」であった。これについては

授業内だけでなく、コミュニケーションカードの紹介という方法で対話を実施し、互いの状況を共有した。実際におこなわれた企画は、下記のとおりである。

- ・ 悲しみを浄化する音楽ワークショップ
- ・ 映像を撮影して音を付ける
- ・ 既存の動画に音を付ける
- ・ 楽器作り体験（『イチ』からつくろう 音楽の輪～杉本町のシニアの社会的孤立防止～）
- ・ 音からお題を当てるゲーム
- ・ 杉本カメイチイメージソング制作

上記以外に、おとあそび工房と音遊びの会のメンバーとの交流もおこなった。最後に、自ら行なった企画について、どのような視点から評価可能かを話し合った。

3. 即興表現とことばによる対話から

本授業は、今年が初めての開講となるもので、学生の興味や特性を探りつつ実施した。特に留意したことは、なるべくことばでの対話の時間をおろそかにしないことである。後期開始時点では内容やスケジュールは決まっていなかったが、学生に任せつつ、互いに話し合いながら進められた。期末レポートでは、それぞれ学んだ内容が、さまざまに異なる側面から考察されていた。それらは、音や言葉でのコミュニケーションの方法について、音と意味の関連について、音楽とは何かに関する知見の広がりについて、音楽実践の評価の難しさや可能性について、即興音楽が自己肯定感にもたらす意義について、そして安心して自己表現ができるための場づくりや、その際に必要な寛容、許容といった態度がもたらす意味などであった。

おとあそび工房、および音遊びの会のメンバーと共に行なった授業では、その対話の中で、自らの授業を誇らしく語る人も見られ、また、授業内で考案された音楽の方法が来年度以降に継承されていくことに希望を見出す意見もあった。次年度へと継承されるなかで変容する内容に期待したいと考えている。